

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号

※ 甲 第

号

氏 名

藤田 祐史

論 文 題 目

「芭蕉」を使用する

——近現代小説と古井由吉の試み——

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	日比	嘉高
委員	名古屋大学	教授	飯田	祐子
委員	名古屋大学	教授	塩村	耕
委員	愛媛大学	准教授	青木	亮人

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は松尾芭蕉の俳句を作品中で使用する近現代小説を対象に、人々が俳諧の世界と関わる経験の諸相や、俳諧という伝統的な短詩形ジャンルを近代の小説表現に織り込んでいく創作方法、そして個別の作品のあり方について論じたものである。

第一部「俳諧と小説の経験——「芭蕉」を使用する人々」(第一章から第五章)では、個々の登場人物による芭蕉句の使用に注目し、ある俳諧を口にしたたり、思い出したりすることで何が起こるのかを問い、俳諧と小説の関係を論じた。その上で、「旅」「連環」「交流」「再生」「共存」というキーワードを提示し、俳諧のさまざまな使用のあり方を示した。また、第一部では芭蕉句を視点にした小説の精読によって、対象小説(岡本かの子『東海道五十三次』、川端康成『雪国』、横溝正史『獄門島』、瀧井孝作『野趣』、リービ英雄『千々にくだけで』)の新たな読解を提示した。具体的には、第一章では『東海道五十三次』について、「木枯しの身は竹斎に似たるかな」句の喚起する世界と「私」の経験の微細な「ずれ」に注目し、同時代とは別の未来へと向かう期待を書いた小説として読み解いた。第二章では『雪国』について、芭蕉およびタナバタツメの物語、星の神話など、「荒海や佐渡に横たふ天の河」句から連想される物語と重ねることで、登場人物の関係を考察した。第三章では『獄門島』について、俳諧の使用という視点から「封建的なもの」と「戦後的なもの」が相克する作品として位置づけた。第四章では『野趣』について、想起される連句と小説の描写の重なり趣向を指摘し、ありのままを書く書き手という瀧井の像を更新した。第五章では『千々にくだけで』について、芭蕉の句が二つの言語によって想起されることや、主人公が街を歩きながら街頭の多言語表現を拾いあげていることに着目し、言語的な複数性を梶子にテロへの復讐という単一的物語に抗していると論じた。

第二部「俳諧と小説の表現——連句を使用する古井由吉」(第六章から第八章)では、継続的に俳諧を小説に組み入れてきた例として古井由吉の小説を扱い、表現として俳諧を使用する彼の連句的創作法を論じた。第六章では、古井の「芭蕉」使用について、連句重視、連句と小説創作法の接続、境界に対する感覚との連動という三つの特徴にまとめた。第七章では、古井の小説における挿話と挿話、文と文とが連句の「付合」に倣って紡がれていることを長篇『野川』の読解を通して指摘した。また、その創作方法は自らの体験としてのみでは語り得ない空襲体験を語るための表現であることを捉えた。第八章では、章と章の「付合」に注目して連作短篇集『白暗淵』を読み解いた。また、連句的創作法について、空襲体験だけでなく、日々の生活に潜む災厄を感受する手法として、前章までの議論を踏まえつつ位置づけた。

本研究全体を通して、俳諧と小説の関係の全体像と具体像を提示し、芭蕉の俳諧にとって小説は、その詩趣を更新する再創造の場であり、同時に小説にとっての芭蕉の俳諧は未知の表現を拓く動因になることを明らかにした。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

本論文の設定した中心的課題は、近現代の小説が伝統的な短詩形ジャンルである俳句をその内部にどのように取り込んで来たのかという点にある。具体的には、松尾芭蕉の作品を軸に、幅広く近現代の小説作品を参照し、近現代小説における芭蕉の受容研究・翻案研究を行っている。ただし著者の関心は、芭蕉作品が近現代の作家たちへどのように影響を与えたのかというような単純な影響関係にあるわけではない。本論文で試みられたのは、作品世界の登場人物のありさまを精読しながら「俳諧を読む」という経験を考察することであり、個別の作家の創作法やその変遷をたどることによって、文学史的な展望を浮上させることである。これらは従来の研究が示してこなかった視角であると評価できる。なお、本論文に収められた各章はそれぞれそのほとんどが外部の査読付き雑誌に掲載されている。

本論文の達成として評価できる点は三つある。一点目は、近現代小説における芭蕉の受容状況を網羅的に調べたことである。正岡子規など近代俳句への芭蕉の影響については先行研究があるが、本論文は小説作品に焦点を当てており、独自の成果を示している。明治期から現代まで幅広く作品を渉猟しており、また横溝正史を論じながら、あわせて探偵小説における受容の展開を追跡したことも興味深い成果となった。

二点目はその歴史的な展望を示したことである。一点目の達成とも関連するが、幅広く関係作品を集めただけでなく、それらを史的な展望をもって整理した点に価値が認められる。初期においては、俳句作品の世界や主題を比較的単純に小説作品の世界に利用するようなあり方だったものが、当該の句作の有する表現の広がりや豊かさを作品の筋立てのなかに織り込んでいくような、より複雑な使用例が見られるように展開していったことを指摘した。

三点目は、個人作家の作品群を精読しながら、俳諧や連句の論理を生かして小説の制作を行う、小説創作法のダイナミズムを明らかにしたことである。とりわけ、第二部の古井由吉に関する論考は、複雑で重層的な表現をもつ古井の諸作を丁寧に分析しながら、俳諧や連句への作家の関心の深まりと、作品世界の変容とを説得力を持って示し、高い質の成果を示している。

もちろん瑕疵がないわけではない。近現代作家たちの創作法や作品世界に焦点を当てているとはいえ、江戸期における芭蕉句の解釈にはもう少し気を配るべきであったし、「使用」や「経験」などといった本論文が独特の役割を付与した概念語については、より緻密に定義を示すべきであった。とはいえ、いずれも本論文の価値を損なうものではなく、上述した本研究の達成は揺るがない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。